SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

富士市と静岡大学との連携

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 真人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7300

富士市と静岡大学との連携

附属教育実践総合センター　山本真人

「小中連携」「地域連携」「〇〇連携校」など、教育現場では、「連携」という言葉があふれています。そもそも「連携」とは何でしょうか？辞書的な意味としては、「互いに連絡をとりながら、協力して物事を行うこと」や「同じ目的を持つもの同士が連絡を取り合い、協同して物事にあたること」などとなります。この平易な言葉にも、実は奥深さがあります。連携は、その必要感やニーズが双方全く同じということはありませんが、連携による相乗効果はもちろん、双方の思いがけない「ずれ」の所在や発見も、連携する上での醍醐味の一つといえるでしょう。

個人的には、私は学校現場（富士中 H21～22）と静岡大学（H23）の双方から、この連携に関わらせていただいた稀有な存在ですが、そのことから多くのことを学ぶことができました。

学校現場の視点からは、やはり大学の「知」や「人」というものに大きな魅力を感じました。例えばほんの一例ですが、富士中の研修においては、今ではもう一般的となってきましたが「可視化」という言葉やその実際は、授業の見方に大きな示唆を与えてくれました。その日行われた中心授業の数時間後に、院生たちがその授業をグラフや図等を交えて分析し、それをもとに限られた時間の研修の中で、協同的な議論がなされた覚えがあります。人という面においては、連携校のＡ校長先生が、「本校においては、この連携の研修では、何はともあれ大学院生の参加が、最大の財産である」というお話をしてくださいました。様々な教職経験をもった現職院生や、意欲旺盛で柔軟な姿勢をもっているストマスの院生が校内研修に参加することにより、心地よい緊張感と刺激が、校内研修を活性化させ、自校の研修の課題ばかりでなく、よさも再認識できるという思いが、Ａ校長先生にはあったのだと思います。

大学の教員の視点から考えますと、これもほんの一例で今回の報告ではあまり触れられていないかもしれませんが、富士市の指導主事（計画）訪問の同行から、いろいろな発見がありました。指導主事訪問では、いわゆる学校全体を間口広く感じ取ることができます。校長・教頭・研修主任・授業者の先生方、養護教諭、栄養士、事務の職員等、そして市の担当の指導主事と、直接顔をあわせて、ほぼ全員と接することができます。普段、学校に頻繁に足を運ぶ大学教員も多いのですが、一日でその学校（文化）を全パッケージとして見聞きし、また話をすることは、とても価値のあることだと思いました。さらに、私はＢ小学校で、偶然、静大教育学部卒の若い先生と出会いました。その若い先生は、静大在学中の学び（熱心に参加した「小学校訪問活動」、「ゼミ」等）と現在とのつながりを生き生きと話してくれました。卒業生のその後や、大学を卒業した後の学びや現実的な課題を知る機会にもなりました。

富士市と静岡大学との連携は、学校現場と大学が、ゆっくりと丁寧に、そして改善しながら進んでいるように思います。双方のよい意味での「ずれ」が、価値あるものになって、連携の有効性が、さらに明確になっていくことを期待します。